

ご注文の際、プライス・コードもご記入下さい。

プライス・コード{a ¥ 1 6 9 0 / A ¥ 1 8 9 0 / B ¥ 2 0 9 0 / C ¥ 2 2 5 0 / D ¥ 2 4 9 0 }

(表示価格は税抜き) 別途消費税が加算されます

www.tambourine-japan.com email: song@tambourine-japan.com

注文方法サイト: <http://www.oct-net.ne.jp/tambouri/order.htm>

[CD/USA {female}] (P14) [CD/CANADA] (P18)

[DVD&CD/USA]

※国内製 DVD プレーヤーで再生可能

- *STEVE EARLE:Live From Austin Tx (DVD) B
*STEVE EARLE:Live From Austin Tx (CD) A
(2000年11月、Austin City Limits でのライブ。バックは Eric Ambell {ギター}、Kelly Looney {ベース}、Will Rigby {ドラムス}。全15トラックの74分。2008作。New West)

[DVD/USA] NTSC all regions

※国内製 DVD プレーヤーで再生可能

- *DAVID BROMBERG AND HIS BIG BAND: In Concert At The Count Basie Theatre, Red Bank, N. J. ¥2590
(12人編成バンドによるライブ。約100分。2009作。Vestapol)
*DAVID BROMBERG: Recorded Live In Concert At Iowa State D University 1985 (55分。Umbrella Entertainment)
*BRUCE SPRINGSTEEN: Classic Performance A
(B. Springsteen の初期のベスト・ライブ集。全14曲。1988年/2005年。American Legends)
*EMMYLOU HARRIS: Live In Germany D
(2000年の Spyboy をバックにしたドイツでのライブ。全13曲。2011作。Immortal)
*BOB DYLAN: Don't Look Back C
(1965年イギリスツアーのドキュメンタリー。1時間35分。67/99作。Docurama)
*CROSBY, STILLS & NASH: Live In L. A. A
(1982年ロサンゼルスでの New Universal Amphitheater でのライブ。全23曲で80分。2007作。オランダ Immortal)
*BIG BROTHER AND THE HOLDING COMPANY: Hold Me A
(2007作。Dig Music)
*GRAM PARSONS: Fallen Angel A
(ドキュメンタリー-DVD。103分。2006作。Rhino)
*ANI DIFRANCO: Trust A
(2004年5月11日&12日の二日間行われた Washington DC のクラブでのライブ。全21曲。2004作。Righteous)
*STEPHEN STILLS AND MANASAS: The Best Of Musikladen A
(72年のテレビ・ショーのライブ映像。40分。Pioneer)
*WILLIE NELSON: Willie A
(91年の "The Great Outlaw Valentine Concert" {全14曲} と "Nashville Superstar Concert" {全12曲}。88分。2002作。MVD)
*TONY JOE WHITE: In Concert A

- (92年ドイツのライブ・ハウスでの熱いライブ。全11曲。約60分。ドイツInakustik)
- *JOHN DENVER:Montana Christmas Skies A
(全14曲。47分。99作。Delta)
- *DUKE ROBILLARD:In Concert A
(94年ドイツのテレビ出演時のライブ映像。全10曲。2001作。ドイツInakustik)

[DVD/U S A] PAL all regions

※PAL専用DVDプレイヤーかパソコンで再生可能

- *WILLIE NELSON&LEON RUSSELL:In Concert a
(Paradise Showのライブ。Leon[ピアノ]とWillie[ギター&ピアノ]のアコースティックなソングデュエットそしてMaria Muldaur&Bonnie Raittそしてフルバンドの数曲は二人の持ち味がたっぷり楽しめるライブ。55分。2005作。ドイツAll Stars)
- *JAMES TAYLOR:In Concert a
(副題“You've Got A Friend”。バンド付き18曲入りライブ。“Sweet Baby James”から変わらぬJamesの温厚な人柄がそのままかつ音楽性もシンプルなのからポップでファンキーなのまでそのままの温かいライブ。2004/2005作。82分。ドイツAll Stars)

[DVD/U S A] NTSC Region 1

※NTSC Region 1専用DVDプレイヤーかパソコンで再生可能

- *JIM GROCE:Have You Heard — Live A
(“You Don't Mess Around With Jim”, “Operator”, “Bad, Bad Leroy Brown”他全15曲入りライブ。約1時間10分。2003作。Shout)

[DVD-AUDIO/U S A]

※国内製DVDプレイヤーで再生可能

- *JOHN SEBASTIAN:From The Front Row, Live ¥1000
(全16曲入り弾き語りライブ。画像はライブ映像ではなく、1曲1曲静止映像。2003作。Silverline)

[VIDEO/U S A] 日本のVHS方式でご覧になれます

- *ALLMAN BROTHERS BAND:Live At Great Woods D
(Gregg Allman, Dickey BettsほかによるAllmanの91年のライブ。11曲。90分。92作。Sony)
- *STEVE EARLE&THE DUKES:Transcendental Blues Live D
(全17曲。70分。2000作。E-Squad)
- *TROUBADOURS OF FOLK MUSIC D
(93年UCLAでのライブ。Arlo Guthrie, Richie Havens, Beausoleil, John Prine, Janis Ian, Jefferson Starship, Janis Ian, Odetta。54分。94作。Rhino)

[CD/U S A]

- *A. J. GROCE:Just Like Medicine A
(Dan Pennをプロデューサーに迎えて制作されたJim Croceの息子のA. J. Croceの新作は、驚くかな、マッスルショールズ産南部ロッ

ク〜ドクター・ジョン風南部ロックの風合いのスワンプ。David Hood, Muscle Shoals Horns に Steve Cropper, Colin Linden, McCrary Sisters, Bryan Qwings, Vince Gill, Dan Penn 等で固めた 70 年代風のリッチなスワンプの音にまみれて、A. J. は幸せそうにノドをふるわす。A. J. のヴォーカルは結構ソウルフルで味わいが深い。A. J. ご本人の夢の企画だったので。音も良し、A. J. のヴォーカルも良しで、ご本人も、そしてスワンプ・ファンも夢の中。Willie Nelson も絶賛。A. J. のファンだった Allen Toussaint もたぶん天国で絶賛。(2017 作。Seeding)

*OLD SALT UNION: Old Salt Union A
(Old Salt Union は、2014 年の Freshgrass Band コンテストで優勝したという米国中西部を拠点に活動する五太郎のニューグラス〜カントリーロック・バンド。印象はコンテストの名称の「フレッシュグラス」がぴったしの若々しさと初々しさと輝き感のある音楽。メンバーの内三名が SSW で、それぞれの持ち唄を土臭くって軽やかなサウンドと軽やかな唄とハーモニーで楽しませる。軽やかなカントリー・ロックのファンには絶好の唄と音楽というか、久々のホームラン・アルバム。不況地帯で生きる彼らは、だからこそ夢や愛を前向きに唄にしていこう。米国の労働者や農夫は励まされるだろうな。音楽の力を感じずにはいられない気分爽快作。2017 作。Compass)

*RAY WYLIE HUBBARD:
Tell The Devil I'm Gettin' There As Fast As I Can B
(アルバムを出すたびに変わらぬ不屈さに驚かされるレッドネック・ロッカー、Ray の待望の新作。プロデュースは Ray 自身。必要最小限のルーツロック・サウンドを伴った本作は、ストレートに泥臭く、かれこれ 40 年以上ファンを魅了してきた彼のアクの強いレッドネックな世界をある種素朴にルーツロック化していて、心にストレートに響く。一匹狼の Ray が背負ったものが大きいほど、唄に重みがある。スライド・ギターをフィーチャーした泥臭いサウンドが、しっかり彼の唄の世界を表現しているのは、お見事！Lucinda Williams と Eric Church がバックিং・ヴォーカルを務めるタイトル曲やラストを飾る Patty Griffin とのデュエット曲など滅茶素晴らしい。年齢を増すごとに凄い。2017 作。Bordello)

*CHARLIE PARR: Dog A
(直前入荷。ミネソタのダルースを拠点に活動する今どき珍しい見聞きして作った唄をボトルネック・ギターをビュンビュン弾いて、飄々とうたう SSW の Charlie Parr の新作で二枚目。彼の気ままな感じの弾き語りフォークは、1970 年代の自由きままなシンガーとひょっこり出くわした驚きと喜び。米国フォーク・シンガーの一つの原点。彼のボトルネック・ギターは Leo Kottke っぽい。当時デビューしてたら、スターになっていたかもね。風貌も唄に似て、人が良さそうな風貌。犬と一緒にの写真や“Dog”という唄もあって、犬好きみたい。2017 作。Red House)

*NORTH MISSISSIPPI ALLSTARS: Prayer For Peace A
(実質的に Luther & Cody Dickinson の二人組による南部ロック！)

たった二人でやってのけてしまう南部ロックの本醸造なこと！
主要楽器はスライド・ギター&エレキギターとドラムス。たった
これだけの楽器でディープな南部ロックを体現してしまうのだから、
恐れ入ってしまう。ヴォーカルを含め、「音」のすべてが全身全霊で
父親譲りの南部ロックを志向していて、発せられる「音」すべてが
圧巻！今の時代、真の南部ロックを体現出来る二人の存在は大きい。
7人のシンガーやミュージシャンが1～2曲でゲスト参加している。
2017作。Songs Of The South)

*JAMES LUTHER DICKINSON FEATURING NORTH MISSISSIPPI

ALLSTARS: I'm Just Dead, I'm Not Gone "Lazarus Edition" A
(2009年に67歳で亡くなったJames Luther Dickinsonが、2006年6月2日、
息子二人[Luther&Cody]が主要バンド・メンバーの南部ロック・バンドの
North Mississippi Allstarsを従えて行ったコンサート・ライブ音源からの
スペシャル・エディション版。スワンプの名盤の誉れ高き彼のデビュー・
アルバム"Dixie Fried" [1972年]で出逢ってから、南部音楽一途だった
James Lutherと彼の音楽を受け継ぐNorth Mississippi Allstarsとによる、
説明不必要な骨太で本醸造な南部ロック～スワンプ。2006年/2017作。
Memphis International)

*THE SHOW PONIES: How It All Goes Down A

(Show PoniesはClayton Cheney [ヴォーカル、ベース]とAndi Carder [ヴォーカル、
バンジョー]の男女のリード・ヴォーカルにJason Harris [ヴォーカル、
ギター]、Philip Glenn [フィドル]、Kevin Brown [ドラムス]を加えた一
姫四太郎の、ロスを拠点に活動するルーツロック・バンド。彼らの
ロックは二人のヴォーカルを含めて、ルーツ色が濃く、また70年代の
カントリー・ロックのように音楽に活気がみなぎっていて、雑草のよう
にたくましい。デジタルの時代に対抗するかのような彼らの健やかな
ルーツロックは、心身を元気にしてくれる。2017作。Freeman)

*JACK GRELL: Got Dressed Up To Be Let Down A

(聴くなり馴染んで、すぐに和んでしまった、まるで70年代の緩くて
人なつっこい唄たち。ヴォーカルの感じはJohn Prineっぽい
が、Michael Hurleyのような、とぼけた悠長さもあったり、Jesse
Colin Youngと彼の仲間達が立ち上げたラクーン・レコード一派の
音楽のような70年代の西海岸田舎志向カントリー・ロック風の
んびり感もあったりで、個人的に全くの「好み」。演奏は無名の
ミュージシャンばかりのカントリー・ロック・バンド編成で、演奏の
緩さも魅力。心も体もニコニコ保証。2016作。Big Muddy)

*TONY JOE WHITE: Deep Cuts B

(南部男Tony Joeの最深部から生まれた南部ロック。2008作。
Munich)

*DANIEL MARKHAM: Disintegrator a

(Terry AllenやFlatlandersタイプとの紹介を見て、興味を持った
テキサスの若きSSWのDaniel Markhamの新作。期待した両大物の
土臭さや泥臭さは薄い、それよりもR. E. M.タイプの西海岸志向
のビタースイートなルーツロックを若者らしく、かつこよくガ

ンガン聴かせていて、いやはや圧巻。Daniel 自身の唄も今が旬の夢の輝きを放っていて、一曲一曲がこだわりの重厚なルーツロック・サウンドと共に、聴き応えたっぷり。不思議と曲が印象的で、ふとしたときに頭の中で彼のうたが鳴っている。2016 作。簡易紙ジャケット)

- *THE STATESBORO REVUE:Ramble On Privilege Creek B
(Statesboro Revue は Stewart Mann の南部ロッカーの貫禄たっぷりなヴォーカルをフィーチャーしたルーツロック・バンド。彼らのロックは、70 年代の南部志向、特に Capricorn 産のアメリカン・ロックの匂いが充満。無骨というか、荒削りというか、骨太なロックを体現していて、しかも Stewart の入魂のヴォーカルと相まって、聴き応え十分。すべてが 70 年代のバンドがひょっこり現代に姿を現わしたかのような「音」だ。2013 作。Blue Rose)
- *MUSTARD' S RETREAT:5 Miles Or 50,000 Years A
(1970 年代から活動する二人組 {David Tamulevich & Michael Hough} の 1990 年のライブで発売は 1993 年作。本作は約半数が二人の心温まるオリジナル曲で、米国フォーク流のストーリーテリングな唄の世界を楽しませる。全 14 曲。1993 作。Mustard' s Retreat /発売年の古い CD ですので、検盤をしてお送りします)
- *PROFESSOR LOUIE AND THE CROWMATIX:Wings On Fire a
(The Band のロック・スピリットを受け継ぐウッドストックのロック・バンドの本作は Rick Danko と Levon Helm に捧げられたもので、そのスピリットは一段と高潔。彼らのロックは Levon Helm のスタイルを基本にニューオリンズ色やロック色を濃くしたもので、そのエネルギーは熱い。ゲスト: John Platania, Michael Falzarano。2012 作。Woodstock)
- *RICHARD DOBSON:Here In The Garden ¥1500
(Townes Van Zandt や Guy Clark と共にテキサスのフォーク・ソングを引っ張ってきた Richard Dobson の六枚目。本作は Richard が 1999 年にドイツをツアーした時に組んだバンドのリーダーの Thomm Jutz をギターと共同プロデューサーで迎えて制作したアルバム。本作は、うたうこと、バンド仲間と音楽することを楽しむかのように、ゆったりとロッキン・カントリーしていて、快適。2013 作。Brambus)
- *MIKE LAUREANNO:Pushing Back Wintertime B
(Mike Laureanno は、今は亡き Jack Hardy のハイパートのヴォーカル・ハーモニーのシンガーとして、かれこれ 12 年間、Jack Hardy と活動を共にしてきた SSW。Jack に較べ、Mike の声はやや高めなのだが、押し殺したようなかすれた声まで似ているのだから。Mike は Jack から唄の心を学んだようだ。2013 作。Mike Laureanno)
- *KEITH SYKES:It' s About Time(1993 作。Oh Boy) A
- *TOM RUSH:Celebrates 50 Years Of Music D
(CD+DVDセット。Tom Rush の音楽人生 50 周年記念のライブ。録音は 2012 年 12 月 28 日。DVD を見た。ゲスト {David Bromberg, Jonathan Edwards, Buskin&Batteau, Dom Flemons} 全員集合のもと、Tom Rush の唄 "Hot Tonight" で幕開けした後、ゲストの唄が 7 曲。Tom の出番はその後、8 曲。ひょいっと 70 年代にタイムスリップ。映像で見る Tom は現役ハリハリ印象。ホーナスにはインディエー、リハール風景そして David Bromberg

の“Tongue”他4曲がライヴで収録されている。CDはDVD収録曲16トラックから13トラックを収録。2013作。Appleseed)

- *US RAILS:Heartbreak Superstar A
(Tom Gillam, Ben Arnold, Scott Bricklin, Matt Muir, Joseph Parsons の誰もがヴォーカルを担う今日のアメリカン・ロック・シーンで、最も愛すべきバンドのひとつ、US Rail の新作。70年代の主に西海岸のロック・バンドが保持していたアメリカン・ロックの土臭さや泥臭さを濃縮したロックは、昔どこかで聴いたことがあるようなヴォーカルやサウンドで、体にすこぶる美味しい。バンドの連中皆が、昔のロックに夢を馳せて、夢を追っかけてロックしているような素敵なロックだ。2013作。Blue Rose)
- *THE DIRTY GUV' NAHS
:Somewhere Beneath These Southern Skies A
(ナッシュビルのガッツあるルーツ・ロック・バンド。本作は3枚目。ナッシュビルと言えば、昔はカントリーのメッカだったが、彼らのロックは南部っぽくて結構気骨があって、真にクワなロックを体現する。リード・ヴォーカルの James Trimble の、アメリカン・ロック魂のあるソウルフルなヴォーカルは、骨太なバンド・サウンドと一体となって凄いインパクトがある。Levon Helm Band との共演、そして Levon Helm のスタジオでの録音経験もあるそうだ。ラストの“One Dance Left”では、Levon Helm っぽいヴォーカルを振り絞ってもいる。2013作。Blue Rose)
- *I SEE HAWKS IN L. A:Mystery Drug A
(ヘンなグループ名。総勢8名編成のこのバンドは、1999年にLAで結成されたという。バンド編成はアルバムを出すごとに変わっていて、以前のアルバムには Chris Hillman も一員だったことも。唄も音楽も、まるで昔の西海岸の自然派カントリー系ロック達のように大らか。音楽を楽しむ空気が伝わってくる。2013作。Blue Rose)
- *ANDREW CALHOUN:Living Room a
(本作で聴く Andrew の唄は、唄に揺ぎがなく、大きな優しさのようなものが感じられて、Andrew の SSW としての成長というか、円熟味が感じられるもの。自室でアコースティック・ギターを爪弾き、リラックスしてうたう Andrew の数々は、心穏やかにする。w. Casey Calhoun (Andrew の娘さん。素直な唄が気持ち良い)、Tracy Grammer, Jenna Rawling, etc. 2013作。Waterbug)
- *AD VANDERVEEN:Driven By A Dream B
(Iain Matthews とのデュオ“Iain Ad Venture”の Ad Vanderveen の本作はところどころ Neil Young with Crazy Horse をもホツさせる思いっきりルーツ回帰&若かりし夢回帰の見事なアメリカン・ルーツ・ロック。至福保証。2012作。Blue Rose)
- *DAVID MUNYON:Pretty Blue C
(D. Munyon の本作は、彼の人生を振り返る内容のアルバム。齢を重ねた David のしゃがれ声は益々味わいが深くなって、これまでの内省的ニュアンスのどのアルバムよりも心の底に響くものになっている。2011作。Stockfish)
- *MICHAEL JOHNSON:Moonlit Deja Vu a
(ミネソタのヴェテランSSW の M. Johnson の12年振りの本作は月を眺めながらロマンティックな気分ほんわかと酔うような感じ。ギター名手でもある寡

黙だが、星の輝きのある美しいギターを伴奏に、ほのぼとと一人、そして娘の Truly や Maud Hixson 嬢とデュエットで、酔うようにうたう。2012 作。Red House)

- *MARK DVORAK:Time Ain't Got Nothin' On Me a
(フォークギター、ブルースギターのギター演奏にも定評のある M. Dvorak だが、曲調により様々な表情を見せる鮮やかなギターの伴奏に乗ってうたわれる彼の唄は体の芯から暖まる優しい眼差しの穏やかで優しい唄。ギターのメリハリがしっかりしているせいか、彼の穏やかな唄の穏やかさが引き立つ印象で、ふわふわと極楽な気分になる。ゲスト: Michael Smith。2011 作。Waterbug)
- *LONG GONE "Utah Remembers Bruce "Utah" Phillips a
(70 年~80 年代、Utah Phillips 作の唄をうたう SSW が本当に多かった。本作は Utah の唄に影響を受けたという SSW の Kate MacLeod が Utah の息子の Duncan の協力を得て制作した Utahソング集。Philo が存在していたら、Philo が真っ先に企画しそうなアルバムだ。トラックの語りと一曲グループの唄以外の 16 曲は全て Utah の唄を愛する SSW によるギター等の弾き{奏き}語り。Kate MacLeod 以外は初耳の SSW ばかりなのだが、一曲一曲の「唄」が瑞々しく新鮮。2011 作。Waterbug)
- *MAD BUFFALO:Red and Blue a
(カントリー・ロックは不滅を実感させるナッシュビルの SSW の Randy Riviere がヴォーカルの Mad Buffalo。カントリー・ロックのスタイルだが、一つ一つの唄は Randy の SSW としての持ち味が出ていて、むしろその各曲の個性がカントリー・ロック・スタイルの音作りをどこかカントリー・マンのロマンっぽい深みのあるものにしていて、Randy の唄の味わいも深まっている。w. Reggie Young, Chad Cromwel {Neil Young Band}, etc. Mad Buffalo)
- *RANDY BURNS:The Simple Things a
(昔のままの瑞々しい 2008 年作。CD-R。自主制作盤)
- *CARTER BROTHERS:The Road To Roosky a
(これは気合の入ったブルグラス系カントリー・ロック。カーター・ファミリーの家系の Tim&Danny 兄弟の本作はカントリー/ルーツ・ロックの深さが違う。骨太のカントリー・ロック。w. Sam Bush, Tim O'Brien, Ferrell Stowe。2011 作。Compass)
- *ERIC ANDERSEN:Blue Rain C
(E. Andersen の本作は闇の中で直向きでブルかつブルース色濃厚なルウェーでの 2006 年のライヴ。本作の彼は何かに取り憑かれたように凄い。2006 作。ルウェー-Blue Mood)
- *ERIC ANDERSEN:Ghosts Upon The Road A
(88 作。カガ Alert Music)
- *BILLY C. FARLOW:You Better Run a
(元 Commander Cody&His Lost Planet Airmen の Billy の本作は重厚な南部ロック。w. Mary-Ann Brandon, Fred James, Jeff Davis, Mark Horn。2011 作。トイソフPV)
- *GREG BROWN:Freak Flag A
(ブルース、カントリー、フォーク等アメリカン・ミュージックの要素混在で、G. Brown 印の煮込み味 SSWアルバムを創作し続けて彼だが、本作も同じ。この旨みある味わいは彼にしか出せない。w. Bo Ramsey, Mark Knopfler, Richard Bennett, David Mansfield, etc. 2011 作。Yep Roc)

- *GREG BROWN: Dream City B
 (副題“Essential Recordings Vol. 2, 1997 - 2006”。1997 - 2006 の間収録の Red House と Trailer の音源からの 16 曲と未発表音源からの 4 曲の二枚組。2009 作。Red House)
- *AZTEC TWO-STEP: Days Of Horses a
 (初めて聴いた時、耳を疑った。Rex Fowler & Neal Shulman の Aztec の唄は彼らの 72 年のデビュー作と変わりなく、深緑の若葉のように清々しい。二人によるヴォーカル・ハーモニーの初々しさは彼らならではのもの。2004 年のベスト・アルバム。CD-R。Red Engine)
- *RICHIE FURAY: I Am Sure a
 (Poco/Richie Furay ファンだったら “The Heartbeat Of Love” と同じくらい歓喜の声を上げることに必至のベスト・アルバムが 2005 年の最高にご機嫌な Richie の CD。共演者は Chris Hillman, Dan Dugmore, Jimmy Ibbotson, Bob Carpenter, Jeff Hanna, Michael Rhodes, etc. もうこれは出来すぎなくらいな Richie がリード・ヴォーカルの Poco 風カントリー・ロック。全 13 曲。ItsAboutMusic.com)
- *JAMES McMURTRY: Childish Things a
 (昨今の Ray Wylie Hubbard クラスの泥臭く、ずっしり重みのあるアメリカン・ロック。ヴォーカルもサウンドも地鳴りがするほど鈍く唸りを立て凄みを放つ凄いロックだ。2005 作。Lightning Rod)
- *STEVE EARLE: Washington Square Serenade B
 (CD と DVD のセットの限定盤。DVD は国内プレイヤーで再生可。S. Earle の本作はまるでデヴィッド・リンの霧囲みの、初期 Dylan やそれを通り越してアラバマ・フォークの土臭さに到達したりもする文字通りアメリカン・ミュージックの根っ子回帰志向アルバム。DVD はニューヨークのスタジオ・ライブ 3 曲他で 37 分 24 秒。2007 作。New West)
- *PONDEROSA: Moonlight Revival A
 (南部アラバマから颯爽とデビューした 4 人組ロック・バンドの Ponderosa は南部魂を持った、若い、今どき珍しく骨のあるアメリカン・ロック・バンドだ。南部系アメリカン・ロック・バンドのヴォーカルとしては理想的な Kalen Nash [男性] のソウルフルなヴォーカルに粘っこいエレキ・ギターと重厚なロックはもう抜群。2011 作。New West)
- *KIP BOARDMAN: The Long Weight a
 (音楽的には Harry Nilsson が近いだろうか。唄が自由に散歩でもするかのようにな軽やかで、豊かなイメージが広がる。ヴォーカルは Steve Forbert っぽい。Gia Ciambotti, Claire Holley, Kristin Mooney の女性バック・ヴォーカルを含め、バンドのサウンドがオール・アメリカン・ミュージックのスケールで巧み、かつ自在で見事。2010 作。Ridiculous)
- *STORYHILL: Shade Of The Tree a
 (自主制作で 12 枚のアルバムを発表し、2007 年に Red House から “Storyhill” を発売し、多くの SSW ファンを虜にした Chris Cunningham & John Hermanson のヴォーカル・デュオ “Storyhill” の本作は、SSW の唄心というか良心が詰まった湧き水のごとき清き逸品。2010 作。Red House)
- *JIM POST: Reach Out Together A
 (白髪の爺さんになった Jim の声は軽やかで若々しい。Jim の飄々と

した唄と Moby Grape の Jerry Miller の歯切れの良いギター、そして Randy Sabien のフィドルと Andy Steil のスライドギターやハンゾーはぴったし噛み合っていて、抜ける青空のような屈託のない Jim の唄は最高に輝いている。2009 作。Jim Post)

- *GEORGE ENSLE: Build A Bridge A
(Townes Van Zandt が「George Ensle は最も影響力のある尊敬すべき SSW の一人」と賞賛するテキサスのヴェテラン SSW の George の唄はどことなく Jerry Jeff Walker の風合いなのだが、精神が自由というか飄々としていて、唄に爽やかさが感じられる。Bill Staines 的な風合いも。SSW ファンの愛聴盤になること請け合い。2008 作。Berkalin)
- *MARK STUART: Songs From A Corner Stage (99 作。Gearle) A
- *BUTCH HANCOCK: War And Peace A
(初期 Dylan を想起させる彼本来の粗い肌触りの引きずるような唄は流石。抜群の最近作。w. Joe Ely, Jimmie Dale Gilmore, Rob Gjarsoe。2006 作。Two Roads)
- *ERIC TAYLOR: The Kerrville Tapes a
(Kerrville Folk Fes でのライブからの全 10 曲。全曲ギターの弾き語りだが、鮮やかなアコースティックギターの伴奏とまるでスタジオ録音のような唄うことに集中した Eric ならではの情景描写が見事な心痺れる叙情的な唄の数々。絶品。2003 作。Silverwolf)
- *THE NORMAN FISHINTACKLE CHOIR
: One Kind Of Bait In The Bucket A
(72 年作「Out The Window」と 73 年作「Shimmy She Roll, Shimmy She Shake」の Jim Pulte がヴォーカルのバンド。昨今のスワンプ系アルバムでは最もスワンプ色が濃い。ファン感動保証。2007 作。Windstorm)
- *DANNY FLOWERS: Tools For The Soul A
(本作はカントリー調、初期 Ry Cooder 調、南部ロック調そしてゴスペル調 [結構 Leon Russell っぽい] 等、どれも唄も音楽の魂に触れるもので、一曲一曲アメリカン・ルーツ色が濃厚で土臭くかつ泥臭い。w. Emmylou Harris, John Cowan, Steve Mackay, etc. 2007 作。Brash Music)
- *JIMMY HALL: Rendezvous With The Blues A
(Johnny Sandlin のプロデュースでアラバマ録音の Wet Willie の J. Hall の本作はティーン・サクスな本仕込みブルース。David Hood, Clayton Ivey, Johnny Sandlin, Jack Pearson, Bill Stewart 等による伴奏はブルース色濃厚な南部ロック。3ボーナス・トラック付で計 14 トラック。2006 作。Rockin' Camel)
- *TOM MAY: Blue Roads, Red Wine a
(かれこれ 35 年以上のキャリアのヴェテラン SSW の T. May の本作はうたう心優しい旅人そのままに旅先の思い出の唄や友愛の唄や夢や希望の唄などがそっと優しくうたわれている。Tom のヴォーカルはそっと包み込むように優しい。ヒドゥン・トラックが 1 曲隠されている。ほほえみの一曲。2008 作。Waterbug)
- *DAVID MALLETT: Midnight On The Water a
(2005 年夏のライブ。「Pennsylvania Sunrise」時代を思い起こさせる唄声に感激。2006 作。North Road)
- *A. J. ROACH: Revelation ¥1500

(ヴァージニアの山奥育ちで伝統音楽を聴き、若い頃古いアパールの聖歌をうたっていたという A. J. だが、彼の唄の芯の部分でカントリーやブルース等白人と黒人のルーツの音楽がミックスされた音楽性を保持し、伝統的聖歌やゴスペルの祈りから発した柔軟で逞しい意志のようなものが感じられる。Great!2007 作。Waterbug)

*TINSLEY ELLIS: Moment Of Truth A
(南部ブルース・ロックの大御所登場。いやはや鳥肌立つブルース・ロックが次から次。エレキギターをかき鳴らし、大地揺らすブルース・ロックを叩き出す。全てが骨太で肉感的。w. Kevin McKendree, The Devil One, Jeff Burch, Mike Lowry, Michelle Malone。2007 作。Alligator)

*ALASTAIR MOOCK: Fortune Street a
(通好みのスルメ味 SSW アルバム。主に鮮やかなギターの伴奏でダミ声でうたう Alastair のざらっとした感触の唄は静かなインパクトがある。Chris Smither の“Train Home”のプロデューサーの David Goodrich のプロデュースは Alasdair の個性を際立たせていて見事。Chris Smither ファン是非。2007 作。オランダ CoraZong)

*RAMSAY MIDWOOD
: Popular Delusions&The Madness Of Cows a
(J. J. Cale 風いぶし銀南部ロック。Produced by Don Heffington [ドラムス]。w. Greg Leisz, Randy Weeks, Jake Labotz, David Jackson, etc. 2006 作。Farmwire)

*DAN HICKS&THE HOT LICKS: Featuring An All-star Cast Of Friends ¥2780
(CD と DVD のセット。CD、DVD とも Dan Hicks の 60 歳誕生日お祝いコンサートのライブ。D. Hicks と縁のあるミュージシャンやシンガー総出演の素晴らしいライブ。DVD は PAL でコンサートの前のフィルムから笑わせる。至福保証。CD は全 13 曲で DVD は 2 曲多い 15 曲。2003 作。Surfdog)

*MICHAEL DE JONG: The Great Illusion C
(フランス人 SSW [だが音楽は米国 SSW 系] の Michael [唄は英語] の本作は全曲ギターの弾き語り。一見 Bob Dylan の初期のようなシンプルなおんなのだが、心からの魂震わす唄は素晴らしい。SSW ファン必聴。2006 作。MW)

*MICHAEL DE JONG: Last Chance Romance C
(人のロマンス等がとろけるように深く静かな空気の中で噛み締めるようにゆったりと唄われる。彼独特な独り言そして夢想の世界。2002 作。オランダ Munich)

*STEINAR ALBRIGTSEN&TOM PACHECO: Nobodies B
(自主製作 CD-R。ウッドストックの Levon Helmスタジオで録音された 2000 年作。Tom も Steinar も激性を秘めた知的で叙事的で叙情的なヴォーカルが見事なもう一つの“Woodstock Winter”。w. Levon Helm, Rick Danko, Richard Bell, Scot Petito, Jim Weider, Happy Traum, John Sebastian, Jerry Marotta, etc. 2000 作。Tom Pacheco)

*TONY ARATA: Such Is Life A
(CD-R。Tony はじっくり練り上げられた極上の唄を響きのいいアコースティックギターをお伴にゆったり噛み締めるように唄う。シンプルながら唄が深い。理想的 SSW アルバム。w. Dan Dugmore, Pat Alger, Lee Roy

- Parnell, etc. 2005 作。Little Tybee)
- *TONY ARATA:Way Back When A
(Tony の唄は嬉しくなるほど心優しく心が澄んだ唄、そして音も清々しくてスイートなカントリー・ロック調。丁寧な音作りを含め、一曲一曲に彼の温厚さと誠実さがきっちりと込められていて、心のこもった手作りな作品として全てが温かい。70 年代の良質の SSW アルバムと同じ感触。2000 作。Little Tybee)
- *DAVID MASSENGILL:The Return ¥1050
(倉庫の隅で発見。95 作。Plump)
- *RICHARD MEYER:The Good Life! ¥1050
(倉庫の隅で発見。92 作。Shanachie)
- *TOM OVANS:Tale From The Underground (Great!95 作。NSR) A
- *ROD MacDONALD:A Tale Of Two Americas A
(子の親になった Rod の「唄いたいこと山ほどあり」の思いがガンガン伝わってくるフォーク・シンガーの原点回帰の見事なアメリカン・フォーク。2005 作。Wild River)
- *MARK ERELLI:Hillbilly Pigrim A
(M. Erelli の本作は古きカントリー・ミュージック回帰。Mark のカントリーは懐古趣味を超えて、今の新しいアメリカの音楽としての勢いがある。音楽スタイルは古い音楽新鮮野菜。ゲスト:Erin McKeown。2005 作。Signature)
- *JEFF WILKINSON:Landscapes C
(見聞きした不思議な光景や事件等をざっらとした感触の土臭いサウンドでどっぷり自分のペースで唄う。一曲一曲の自作の唄がタイトル通り Jeff の見聞きし、感じた「風景」のように唄として収まっている。全てが Jeff の時間の流れなのがいい。Brambus)
- *BART DAVENPORT:Maroon Cocoon a
(子供の頃、ヒッピーだった両親のレコード・コレクションを聴き漁ったという彼だが、音楽性は 70 年代の夢想的ブリティッシュ・フォークあるいはソフト・ロック的感触で輝くギターを爪弾き、夢見心地な唄をゆったり描くように唄う。2005 作。Antenna Farm)
- *RAY WYLIE HUBBARD>Last Train Of Thought (95 作。Deja) A
- *DAVID BALL:Freewheeler A
(タイトル曲は Jesse Winchester のカバーだが、このカントリー系 SSW の D. Ball の本作はヴォーカルといいサウンドといいカントリー度が深い。ヴォーカルもサウンドも泥臭くエナジック。w. Mike Johnson, Kenny Malone, Milton Sledge, Dan Frizzell, etc. 2004 作。Acan)
- *FRED KOLLER:No Song Left To Sell A
(どっしりとした SSW アルバムの傑作。Shel Silverstain との共作集で全 14 曲。2001 作。Gadfly)
- *ERIC TAYLOR:The Kerrville Tapes A
(Kerrville Folk Festival のライヴ。2003 作。Silverwolf)
- *J. T. VAN ZANDT:WRECKS BELL B
:Live At The Old Quarter Acoustic Cafe
(ジュニア・ヴァン・ザントの息子 J. T. が 8 曲と Wrecks Bell が 9 曲の全 17 曲入ライヴ。2004 作。Romeo)
- *THE WOODYS:Teardrops&Diamonds A

(Byrds~Every Brothers~Gram Parsons 的全アメリカン・ミュージック・ファンの
琴線に触れる懐古&郷愁ムードとロックする快樂さと恋する思い等が
チャームに表出したほんわか気持ちのいいカントリー・ロック。w. Al Perkins,
Dave Pomeroy, Cam King, Tammy Rogers, Steve Conn, Billy Block,
etc. 2001 作。Dynamike)

- *CELEBRATION! "Highlights From The 40th Philadelphia
Folk Festival" A
(2001 年 8 月 24~26 日に開かれたフェスのライヴ。全 13 曲。出演者は収録
順に Arlo Guthrie, Laura Love Band, Sonia Solas, David
Bromberg, Janis Ian, Richie Havens [All Along The Watchtower],
Tom Paxton&Anne Hills, Chris Smither, Jimmy Johnson, Laurie
Lewis, Tom Rush [Driving Wheel!], Judy Collins。2002 作。Sliced
Bread)
- *RECKLESS JOHNNY WALES: It's Not About The Money A
(ユーモア、皮肉、悲哀など人生のひきこもごもをペーソス漂う唄でうた
う凄く个性的で魅力的な SSW。Randy Newman に似てるが、Reckless
の方が音楽的に開放感があって豊か。w. Jeff "Skunk" Baxter, Clive
Gregson, Dave Pomeroy, Brian Willoughby, Cathryn Craig, Pat
McInerney, Michael Snow, etc. 2003 作。Villa Villa Music)
- *SAYLOR WHITE: Graven Image B
(風貌は Willie Nelson 風。ヴォーカルは Jerry Jeff 風。どことなく時代
遅れなおっとりした唄と土臭いサウンドはほのぼのとさせ、またしみ
じみといい気分させる。ひ
と言ひと言思い出に浸り、2003 作。Last Call)
- *BILLY JOE SHAVER: Freedom Child A
(オールタイム・ファイリングな Billy Joe の本作は自身のルーツ回帰の懐古趣
味的な一方で、古いカントリーやブルース調の節での Billy のヴォーカルは古臭
くも輝いている。2003 作。Compadre)
- *DAVE SCHRAMM: Hammer And Nail ¥1980
(内省的 SSW アルバムの傑作。99 作。ドイツ Blue Rose)
- *SHAWN SAHM: Shawn Sahn A
(Doug Sahn の息子 Shawn の Doug Sahn そっくり? なニマリの本作。すっ
かりサー・ダグ・ラス・クインテット風なテキサス・メックスとハスキーで甘い Shawn のヴォーカル
は理想のテキサス音楽を体現。ゲスト: Doug Sahn, Augie Meyers, Flaco
Jimenez。2002 作。イギリス Evangeline)
- *PONTY BONE: Fantasize A
(テキサスのドクター・ジョンとでも言うか、縦揺れ、横揺れたつぷりリスミカル。
Ponty のおおらかな太いヴォーカルもいい、いい。ようこそ! ミラクルな
Ponty Bone のテキサス・メックス・ショーの世界へ。2002 作。Loudhouse)
- *DON WILLIAMS: Silver Turns To Gold A
(いわば心の名曲集。SSWファン向けのいい唄ばかり。終始心和む。w. Sam
Bush, Kenny Malone, Tim Williams, Charles Cochran, etc. 2002 作。
RMG)
- *DON MICHAEL SAMPSON: Old Wood Bridge A
(2 枚組 CD-R。あの "Americansongs" の Don の悠々自適の自主制作盤。
各種愛用ギターのアタックの強い巧みなギターを伴奏にした Don の唄は彼

のキャリアがしっかりと熟成されたしたたかでしなやかなもの。
2001作。Red Rose)

- *JEFF TARLTON:Astral Years a
(米国人 SSW だが資質は英国人 SSW 的。90 年代初めに故郷を離れ、録音時はベリンでストリート・ミュージシャン。マソリックで宇宙的音楽は Nick Drake や Tim Buckley を思い出させる。全 20 曲の長い旅。97 作。Delerium)
- *JEFF TARLTON:Dragin Spring a
(前作の延長線上の 2 枚目。少し型にはまった分音楽的。やはり夢の異次元の世界へ。ベリンでの録音。2000 作。Delerium)
- *TONY JOE WHITE:One Hot July A
(スワフな煮込み味。T. J. White ここに在り!2000 作。Hip-0)
- *ALAN GERBER:The Boogie Man A
(スワフ・ロック・ファン感涙の夕なスワフ・ロック。99 作。Mugwamp)
- *CALVIN RUSSELL:Crossroad B
(ギター弾き語りライブ。ごっつい唄が全 16 曲。“想い”が乗り移った粗いギターと“想い”がこぼれんばかりの入魂の唄に釘づけ。2000 作。Last Call)
- *CALVIN RUSSELL:Sam B
(テキサスのヴァンSSW の 8 枚目。プロデューサーが James Luther Dickinson で、バックには Roger Hawkins, David Hood, Brenda Patterson の面々。ロングセラー。99 作。Last Call)
- *TOM ROZNOWSKI:Voice Beyond The Hill A
(T. Roznowski の温厚な人柄が滲み出た心優しい SSWアルバム。70 年代っぽい味と心あるカントリー・ロックが Tom の持ち味を最高に高めている。w. Jon Randall, Rob Ickles, James Talley, Brent Truit, Richard McLaurin, etc. おやじ感涙保証。2001 作。Blazing Stump)
- *HUNTER MOORE:Conversations B
(ナッシュヴィルの SSW。H. Moore の本作は Chris Donohue {ハース}, Phil Madeira {エレクトリック・ギター}、Steve Hindalong {ハカッション} の小編成ながらソリッドかつタイトなルーツ・ロック。Hunter の乾いた粗野なヴォーカルか何とも言えず魅力。2001 作。Brambus)
- *HUNTER MOORE:Delta Moon B
(その昔のベスト・セラー。やや南部寄りかつ繊細さも持ち合わせた本作は今聴いても新鮮。SSW 名盤。w. Kenny Malone, Bob Wray, Russ Pahl, etc. 96 作。Brambus)
- *JERRY JEFF WALKER:Mr. Bojungles C
(2 曲のボーナス・トラック付の計 12 曲入。68/93 作。Rhino)
- *TAJ MAHAL&THE HULA BLUES BAND:Hanapepe Dream B
(西アフリカのお次はハワイ!?Taj の渋いヴォーカルもバンドの音楽もユルユルで心地よいロール感があって、ご機嫌。Taj の各種ギターはもちろんのことウクレレやスティール・ギターも最高の響き。夢心地保証。2001 作。ドット&M)
- *MAIN STAGE LIVE “Falcon Ridge Folk Festival” A
(Kennedys, Dar Williams, Greg Brown, Richard Shindell, Nields, Patty Larkin, Peter Mulvey, Vance Gilbert and more。全 14 曲。99 作。Signature)
- *TOM MITCHELL:When The Moon Is Right ¥1000

(時折、Bob Carpenter をホフさせる世界をも垣間見せる。SSWファン静かなる衝撃作。96 作。Truesongs)

- *ELLIOTT MURPHY・IAIN MATTHEWS:La Terre Commune A
(異色のデュオ。それぞれの口の持ち味とデュエットがバランスよく収められた友情盤。2001 作。ドイツBlue Rose)
- *CHRIS SMITHER:Live As I'll Ever Be B
(何も言うことなし、C. Smither の持ち味そのままが発揮されたギター弾き語りライブ。録音は 96-99 年。全 16 曲。Hightone)
- *DAVID MUNYON:Acrylic Teepees B
(いつも夢想的で透明な D. Munyon の唄の世界。w. Al Perkins, Dave Pomeroy, Craig Krampf。珠玉の逸品。96 作。Glitterhouse)
- *DAVID MUNYON: Slim Possibility B
(ある種神聖とも形容できる D. Munyon 独特な唄の世界だ。非の打ち所のない潔癖さだ。理想の SSWアルバム。96 作。Stockfish))
- *JEB LOY NICHOLS:Just What Time It Is a
(ベアーズガイル録音の傑作“Lovers Knot”に次ぐ待望の New。しばし南部&トロピカル・フィーリングのある本作に夢心地…。知性と感性と職人ワグと三拍子揃った傑作。2000 作。Rough Trade)
- *JERRY JEFF WALKER:Night After Night D
- *BUTCH HANCOCK・JIMMIE DALE GILMORE:Two Roads a
- *MARK STUART:Songs From A Corner Stage(1999 作。Gearle) a

[CD/USA {female}]

- *LARRY CAMPBELL & TERESA WILLIAMS:Contraband Love A
(直前入荷。前作“Larry Campbell & Teresa Williams”から二年。Levon Helm や Bob Dylan や Emmylou Harris や Little Feat 等と、米国ルーツロック・シーンのど真ん中で活動してきた Larry & Teresa の新作は、流石、ブルースやゴスペルやまで取り込んだ米国ルーツロックのど真ん中のロックでうならせる。二人のアコースティック&エレキギター{Larry のエレキギター最高!}そして Bill Payne {ピアノ}, Jesse Murphy {ベース}, Justin Guip {ドラムス}, Glen Patscha {アコ}の少数精鋭メンバーで固めたロックは、息が合っていて気持ちが良いくらいビシッとタイト。それでいてフットワークが軽くて軽快。前作でも聴けた Gram Parsons & Emmylou Harris っぽいや意外なのは、Maria Muldaur 風なもの {Bessie Smith の“My Sweetie Went Away”}。彼らのロックは奥が深い。2017 作。Red House)
- *THE LASSES & KATHRYN CLARE:Live at De Parel van Zuilen C
(オランダの女性フォーク・デュオ“Lasses”の待望の新作は、米国の女性 SSW の Kathryn Clare {ヴォーカル、フィドル、ギター}を加えたトリオでの 2016 年のライヴ。Lasses の Margot {ヴォーカル、ギター他}& Sophie {ヴォーカル、ギター他}と Kathryn の出逢いは 2013 年、アムステルダムにあるアイリッシュ・パブで、以来、交友を深めたという。三人の自作曲を中心に米国トラッドや英国のフォーク・シンガーの Cyril Tawney の曲等を収めた本作は、女性的に優艶でありかつ滋味豊か。実際、ブックレットに見られるロウソクのような照明のみが

点いた会場で、三人心を一にし、静かに心をこめてうたっているかのような素朴さの中に、心通う充実感のようなものが確かにあって、体の芯から穏やかな気分になる。協同で良き唄をうたう三人の歌姫の絆は強い。聴くほどに心和む。2017 作。The Lasses)

*THE LASSES: Daughter C

(オランダのフォーク・デュオ“Lasses”の人気の二枚目。ヴォーカル&ギターの Margot と Sophie の二人がうたうのは、米国、イングランド、スコットランド、アイルランドの伝統歌と Kate Rusby や Richard Thompson 等のフォーク系シンガーの作曲曲。計 13 曲。ユニークなのは、二人のフォークは米国トラッド/フォークっぽいこと。アパラチア民謡風というか、ある種米国フォークの原点的な滋味豊かなフォークの味わいは格別。2015 作。The Lasses)

*MARIA FIBISH & BRUCE VICTOR: A Sweetish Tune A

(シタール、6&12 弦ギター、テナー・ギター、マンドーラ、マンドリンのアイリッシュなアコースティック・サウンドが木漏れ日のような心地さの中、Maria の物語性のある唄がこれまた心地よい。オカロランなど好きな曲、それも演奏していて美しく響く曲を選んで演奏し、合間に物語性のあるうたを入れて、楽しんでいるような、何とも心と体に美味しい二人が奏でる小春日和な音楽と Maria の子に聞かせる子守唄ように優しい唄だ。ずっと聴いていたくなる。2017 作。Noctambule Music)

*DALE ANN BRADLEY: Dale Ann Bradley A

(米国南部のブルーグラスから～ゴスペルまで白人系ルーツ音楽の歌姫で女王の Dale のルーツ回帰の新作。前作の“Pocket Full Of Keys”グラミー賞の候補に選ばれたことが功を奏してか、本作でのルーツ志向には揺るぎがない。Dale のヴォーカルは、土臭く風通しの良い南部の白人系ルーツ音楽を伴って、五月晴れの空を泳ぐ鯉のぼりのように晴れ晴れとしていて、快い。カントリー/ブルーグラスの伝統音楽として味わいも深い。w. Vince Gill {ヴォーカル}, Mike Sumner {バッキング}, Tim Dishman {ベース}, Scotty Powers {マンドリン}, Matt Leadbetter {リフ・ギター} 他。2017 作。Pinecastle)

*MASTERSONS: Transient Lullaby A

(Mastersons は Eleanor Whitmore {ヴォーカル、ヴァイオリン他} と Chris Masterson {ヴォーカル、各種ギター他} の夫婦デュオ。夫婦ともルーツ系 SSW として魅力的な上に、デュオとしても、Pacheco&Alexander や Hardin&Russell など数ある男女シンガー二人組のアルバムの中でも、Chris&Eleanor のヴォーカル・デュエットは、音作りにこだわりを持つ Red House ならではの、土臭くって旨みたっぷりなルーツ・ロック・サウンドにまみれていて、最高級の味わいを味わわせてくれるとびっきりのアルバムになっている。ルーツ志向音楽の奥が深くて味わいが深い。2017 作。Red House)

*SHANNON McNALLY: Black Irish A

(“Black Irish”というタイトルだが、音楽はアイリッシュとは無縁のやや南部志向の女性 SSW タイプの音楽。70 年代の米国 SSW & ロックを体験してきた連中が「夢をもう一度」との思いで、集中力を上げてバックアップしたのが本作。シンガー Shannon の音楽的資

質に最も近いのは Bonnie Raitt。そんな米国南部&ルーツ志向の生え抜きのシンガー Shannon の唄とその資質に見合った旨みたっぷりな土臭い音楽は、この手では最上級。w. Rodney Crowell {プロデューサーでもある}, Colin Linden, Emmylou Harris, Elizabeth Cooke, Byron House, Jim Hoke, Michael Rhodes, etc. 2017 作。Compass)

*BANKESTERS: Nightbird A
(Alysha {マンドリン、フィドル}, Emily {フィドル、バングォー}, Melissa {ベース} の三姉妹シンガーのソロとハーモニーをフィーチャーし、父の Phil {ギター} と Melissa のご主人の Kyle {バングォー、ギター} が三姉妹の魅惑の唄の縁の下の力持ち役で共演した Bankester ファミリーの 6 枚目。2017 作。Compass)

*LAURA CANTRELL: Kitty Wells Dresses B
(Laura の 4 枚目に当たる本作は、Laura が子供の頃からのファンというカントリー・シンガーの Kitty Wells のカバー集。スティール・ギターを含めたカントリー・サウンドの全てがハワイ音楽のような清涼感があって、清々しい。2011 作。Shoeshine)

*BETSE ELLISE: High Moon Order A
(The Wilders のヴォーカル、フィドルの Betse のソロ。13 曲中 7 曲が自作曲で 3 曲が伝統曲。彼女のフィドル演奏はザーク・スタイルのオルド・タイム・フィドルだそうで、僕の耳には John Hartford の女性版のように聞こえる。今の世の中にこんな音楽あり?! と感じてしまうほど、ホームメイドな古臭くて、飄々とした唄と音楽だ。2013 作。Tree Dirt)

*ALICE GERRARD: Bittersweet A
(かれこれ 40 年以上にわたって、アメリカン・ルーツ音楽の第一線で活動してきた Alice の 10 年ぶりの本作は、全曲自作曲の深い味わいのある素晴らしい SSW/フォーク・アルバム。体の中から湧き上がるようなリラックスした唄は、いぶし銀のアメリカン・ルーツ・サウンドを伴って、ある時は心に沁み、またある時は心を和らげ、またある時は心をほがらかにさせる。いぶし銀のアメリカン・ルーツ音楽の名品だ。w. Laurie Lewis, Stuart Duncan, Bob Ickes, Bryan Sutton, Todd Phillips, Tom Rozum, etc. 2013 作。Spruce And Maple Music)

*CATHRYN CRAIG & BRIAN WILLOUGHBY: Real World a
(ナッシュビルの女性 SSW の C. Craig とブリティッシュ・フォーク・グループのストロークスのギター奏者の Brian Willoughby のデュオによる本作は、Brian の美しいブリティッシュ・フォーク・ギターと Cathryn の大人のメロ調の穏やかな唄とが何とも心地よい "Real World" ではなく、"Dreamy World"。ずっと聴いていたい気分。2013 作。Cabritunes)

*ANNIE KEATING: Water Tower View a
(ひとと味違う凝ったルーツ・ロックは本醸造ルーツ・ロック・ファンを唸らせる。こんなにセクスの良いかしたルーツ・ロックは滅多にお耳にかかれない。Annie の唄は、セクス抜群の大人のルーツ・ロック・サウンドと共に心と体に美味しい。w. Bo Ramsey, Jason Mercer, Chris Benelli, Chris Tarrow, John Caban, etc. 2010 作。Annie Keating)

*COSY SHERIDAN: The Horse King a

(ヴェテラン女性 SSW の Cosy の本作はひと味違う。様々なサウンドを創り出すアコースティック・ギターの妙技に驚かせられながら、Cosy の唄の世界へとご機嫌に誘われてゆく。音楽性の基本は Good & Old Time なアメリカ・ミュージック。巧みなワザに裏打ちされた音楽は豊かで柔らか。心晴れ晴れする爽快な SSW アルバムだ。w. David Surette, Kent Allyn, Penny Nichols, TR Ritchie. 2011 作。Waterbug)

- *CAROLINE HERRING: Camilla A
(Caroline の音楽性はフォーク/ルーツ・ロック系だが、その中身は自分の物語を含めて、アメリカの物語。Lucinda Williams 級。ゲスト: Jackie Oates, Mary Chapin Carpenter, Aoife O' Donovan, Kathryn Roberts. 最後の曲はハート・パワーズの「蛍の光」だが、Caroline は自作のメロディに乗せてうたっている。2012 作。Signature Sound)
- *JANIVA MAGNESS: Stronger For It A
(Janiva の渾身の唄とバンドの南部ロックが、ガツと組み合って、感動の嵐。2012 作。Alligator)
- *FRED JAMES & MARY-ANN BRANDON: We Belong Together a
(ナッシュヴィルのヴェテラン SSW & ギタリストの Fred James とナッシュヴィルのスワンプ・クインの Mary-Ann の共演盤。Fred の SSW 的資質と Mary-Ann の南部ブルース & R&B 資質のぶつかり合いは Fred が Mary-Ann の大きな土俵の上で、自身のエレキギターを含め、ガツあるヴォーカルで精一杯対抗する風ながら、Fred は +α の南部っぽい底力を見せ付けている。Mary-Ann のヴォーカルは豊潤なヴォーカルで聴き手を圧倒する。2011 作。ド'イツ SPV)
- *WHEN OCTOBER GOES (1991 作。Philo) A
- *NANCI GRIFFITH: Little Love Affairs (1988 作。MCA) A
- *NANCI GRIFFITH: Flyer (1994 作。Elektra) A
- *REBECCA PRONSKY: Viewfinder A
(ブルックリンの女性 SSW の Rebecca の唄は独特。音楽的には Gillian Welch や Eilen Jewell のような古いルーツ・フォークやルーツ・ロック的な志向性を持ちつつ、トウワング・ギターの多用に加え、声が豊かで、夢想的で朗々としたヴォーカルなど、彼女独特な唄世界を創作している。都会のビルの一室で、夢想しているかのような音楽。2011 作。Nine Mile)
- *LIZ MEYER: The Storm A
(カントリー・フォークの女王 Liz の本作は昔からの音楽仲間や中堅音楽家の協力を得て実現した夢に描いてきた同窓会音楽。Bela Fleck, Emmylou Harris, Jerry Douglas, Sam Bush, Stuart Duncan, Rob Ickes, Byron House, Glen Duncan, Ron Block, Kenny Malone 他。2005 作。オランダ Strictly Country)
- *CARRIE RODRIGUEZ: She Ain't Me A
(Chip Taylor とデュオを組んでいた Carrie の二枚目。本作でデュエットする Lucinda Williams 級。2009 作。Continental Song City)
- *KRISTA DETOR: Chocolate Paper Suites a
(前二作同様、プロデュースは David Weber で、そしてまた前作同様、自身が奏でるピアノの響きが印象的で、時空を超えて、Krista が創作する穏やかで、深く心地よい唄の世界へと運ぶ。Chris Wood, Karine Polwart, Emily Smith, Maura Smiley, Rachel McShane, Malcolm Dalglish, etc. 2010 作。CoraZong)

- *RACHEL HARRINGTON: The Bootlegger's Daughter A
 (2008年作の“City Of Refuge”が好評のRachelの2007年作のデビュー作。Rachelの唄を包む空気は百年前のアメリカ西部、或いはアパラチアだったり、今日のルーツ・ロック風だったり、また今日の田舎のSSW風だったりする。2007作。Skinnydennis)
- *LINDA HARGROVE: One Woman's Life A
 (カントリー・フォーク系のヴァン・ヘイレンSSWのLindaの本作はヴォーカルも音作りもヴァン・ヘイレンの風格漂うGreatなSSWアルバム。名うての楽士達のバックアップが見事。Lindaの揺るぎ無い唄に相応しい演奏で支える楽士はSam Bush, Kenny Malone, Jeff Davis, Dennis Burnside, Pam Rose, Hoot Hester, etc. 2005作。Panacea Productions)
- *KATE McDONNELL: Where The Mangoes Are B
 (Kateの本作が4枚目。Kateならではの壊れそうで逞しい唄たちだ。Kateは今を唄う吟遊詩人。2005作。Appleseed)
- *SUZANNA SPRING: She's Got Your Heart A
 (本作は敏腕プレイヤーによる奥深くもピリッとカッコいいルーツ・ロックの見事さ中で女性ならではの哀愁や感傷や夢想等の感情が実にいい感じで美味しい唄として結実している。カッコいい音の波に乗ってる、って感じだ。2003作。Suzanna Spring)
- *CLARE MULDAUR: Bentley Circle ¥700
 (Geoff&Mariaの娘Clareの2枚目。Clareの夢見るような素朴な唄の数々とこれまた夢見るような素朴なギター、チャリンコ、ホーン等の伴奏の音色の心地よさは憎いほどの素敵さ。2003作。Clare Muldaur)
- *WENDY BECKERMAN: Mango Moon A
 (Jack Hardy おかかえのミュージシャンがバックを固めたWendyの3枚目の96年作。Wendyの持ち味がシンプルにリカルに表出。唄の自由さと彩りのある素敵な女性SSWアルバム。Brambus)
- *FLORAMAY HOLLIDAY: Floramay Holliday B
 (南カリフォルニアの女性SSW。Kelly Willisと比較されることの多いSSWだが、Floramayの方がロク的で南部志向。エネルギーを内にキープした本格的ヴォーカルをテキサスのヴァン・ヘイレン達が本醸造ロックでサポート。w. Lloyd Maines, John Inmon, Gene Elders, etc. 98作。Roseneath Music)
- *ROSALIE SORRELS: No Closing Chord a
 (Malvina Reynoldsソング集。w. Bonnie Raitt, Laurie Lewis, Nina Gerber, Barbara Higbie, etc. 2000作。Red House)
- *PEGGY SEEGER: Love Will... Linger On... a
 (副題“Romantic Love Songs”。子守唄のように夢心地な唄達。w. Colum&Nei MacColl, Irene Scott, etc. 2000作。Appleseed)
- *KIM RICHEY: Bitter Sweet (97作。Mercury) A
- *MARIA MULDAUR: Meet Me At Midnite (1994作。Black Top) A

[DVD/CANADA] PAL 2

※PAL専用DVDプレイヤー/パソコンで再生可能

- *NEIL YOUNG: Heart Of Gold D
 (2枚組。ディスク1はドキュメンタリー+ライブ1曲で、ディスク2は2005年ナッシュビルでのライブ。全19曲。w. Emmylou Harris, Ben Keith, Spooner Oldham,

Karl Himmel, Chad Cromwell, etc. ディスク2のライヴは一曲一曲が聴き所、見所。2005年。ランダ Shangri-la)

[DVD/CANADA] NTSC all regions

※国内製DVDプレーヤーで再生可能

- *LEONARD COHEN: Under Review 1978 - 2006 B
(カナダを代表するSSWのL. Cohenの多数の希少ライヴ映像を含む貴重映像と写真を挟みながらJohn Simon, John Lissauer, David Cohen等L. Cohenのプロデューサーやジャーナリストがアルバムを追いながら彼の音楽を語るドキュメンタリー-DVD。64分。2008作。Sexy International)
- *RONNIE HAWKINS: Still Alive And Kickin' B
(The Bandの前身The Hawksのリーダーでカナダのロック界のホースのRonnie HawkinsのHawks時代の貴重ライヴ映像や今日のバンドのライヴを挟みながら、癌の手術そして快復等R. Hawkinsの普段着の姿と音楽人生が記録されたDVD。Robbie Robertson, Kris Kristofferson, クリントン元大統領がR. Hawkinsを語る。約90分。2004作。CTV)

[CD/CANADA]

- *FRED EAGLESMITH: Standard A
(愛すべきカナダのヴェテランSSWのFred Eaglesmithの愛すべき新作。バンド編成だが、Fredの心はギターを弾き語りしていた時代に初心回帰するように、一心に声をふり絞る。それらの唄は、Roger McGuinnやWillie P. BennettやChip Taylorなどの唄とイメージが重なる。デジタル音とは無縁な粗いルーツロック・サウンドが、彼の不器用に古いスタイルのままの泥臭くルーズなヴォーカルにバッチリ合っていて、ひとつひとつの唄が心にぐさり。「泥臭くルーズ」だが、唄に一匹老狼SSWとしての魂が宿っている。2016録音の2017作。Fred Eaglesmith)
- *BLUE RODEO: 1000 Arms B
(1984年結成のカナダのヴェテラン・カントリー・ロック・バンドのBlue Rodeoの新作は、西海岸カントリー・ロックの王道を突き進む信じられないほど爽快なカントリー・ロック。現在のメンバーはGreg Keelor {ヴォーカル、ギター}、Jim Cuddy {ヴォーカル、ギター}、Bazil {ベース}のオリジナル・メンバーにGlenn Milchem {ドラムス}、Michael Boguski {キーボード}、Colin Cripps {ギター、ヴォーカル}の六太郎。PocoとByrdsの美味しいところを清々しく受け継いでいて、感涙。彼ら、音楽で青春してますね。2016作。TeleSoul)
- *BLACKIE AND THE RODEO KINGS: South A
(Stephen Fearing, Colin Linden, Tom Wilson, John Dymond, Gary CraigのBlackie&The Rodeoの2014年のアルバム。フォーク系のS. Fearing, カントリー&南部系のT. Wilson, 南部系のC. LindenのそれぞれのSSWがこのバンドのために自作曲を持ち寄って、それぞれの個性を活かした年季の入ったルーツロックを創作しているのだが、特にWillie Pの資質に似た持ち味のT. Wilsonと南部志向のC. Lindenの二人がリード・ヴォーカルを担う曲の土臭さや泥臭さは、Willie P+αの味わいを醸し出していて、圧巻。

2014 作。FU:M)

- *BLACKIE&THE RODEO KING:High Or Hurtin' B
(Stephen Fearing, Colin Linden, Tom Wilson から成る“Blackie”の
1996 作。True North)
- *BROOKE MILLER:Familiar D
(Super Audio CD。プリンスエドワード島育ちの女性 SSW でギタリ
ストの Brooke Miller は、Bruce Cockburn の緻密さと Joni
Mitchell の繊細さを併せ持つカナディアン SSW らしいアーティス
ト。カナダのかたがの SSW アルバムとして完璧。ギター・ファンも唸
るよ。2012 作。Stockfisch)
- *STEPHEN FEARING:That's How I Walk B
(最強の SSW。S. Fearing の New は、朋友 Colin Linden の強力応援を得、
Stephen の感性鋭いシャープな唄が、より深みと味わいをもって心に
突き刺さる。w. Colin Linden, Richard Bell, Shawn Colvin,
Jonelle Mosser, Ben Riley, etc. 2002 作。True North)
- *RICHARD NEVILLE:Old Souls A
(Richard Neville はかた 東部のラブラトル半島の SSW。ラブラトル半島の
人々や文化に触発された自作の唄の数々は、ほっこりしていて、
古くからの友の唄を聴くように体にしみわたる。例えば、田舎暮
らしをしていて、穏やかになった Gordon Lightfoot のようなメー
の唄。自身のギターの弾き語り+軽やかなカントリー・ロック風サウンドは、彼
の温厚な唄とともに何とも心地よい。SingSong)
- *BONNIE DOBSON:Take Me For A Walk In The Morning Dew A
(Bonnie Dobson の 2014 作。録音は英国のロンドン。Her Boys と名付け
たグループ {B. J. Cole もメンバー} を伴って制作された本作は、衰えを
知らぬ歌声と決して懐古趣味的ではないリリットなアコースティック・フォーク
〜フォーク・ロックに現在進行形の今の Bonnie の音楽が瑞々しく表出さ
れている。12 曲目の“Sandy Boys”などは Fairport みたいな気力充
実のフォーク・ロック。2014 作。Hornbeam)
- *IAN TAMBLYN:Side By Each B
(海の生き物に心を寄せ、旅の思い出を回想する Ian の心の唄は、本
作において、一段と穏やか。ギターの美しい響きなど、ふと“High
Winds White Sky”の頃の Bruce Cockburn を思い出した。w. Rebecca
Campbell {彼女のほわっとしたハーモニー・ヴォーカルは Ian の音楽に欠かせ
なくなっている}, Fred Guignion, Pat Maher。2013 作。
North Track)
- *IAN TAMBLYN:Gyre B
(「四つの海岸プロジェクト」は一休み。地球を旅する Ian のその感動の瞬
間の心情が一枚の印象的な風景写真のように詩的に詠まれ、うた
われている。本作は W. G. Tamblyn {1923-2009}, Willie P. Bennett
{1951-2008}, M/S Explorer {1968-2007} の霊に捧げられている。評
価する隙を与えない名作。2009 作。North Track)
- *IAN TAMBLYN:Superior - Spirit And Light B
(本作は四つの海岸プロジェクトの 1 作目で、I. Tamblyn が育ったところ
であり、音楽の旅のスタート地のスペリオル湖と北西バンクーバーに焦点を当てた
もの。本作は青春時代を過ごした湖の生活に想いを馳せ、心遊ばせ

た唄たちが収められている。煌くギター演奏ほか生まれた音楽は細心の音作りが成され、Ianのまさに“Spirit and Light”に象徴される魂が乗り移った唄はかつてなくとも言っても過言ではない程彼らしいヒューマニティーと詩情を高めている。2007作。North Track)

*IAN TAMBLYN:Angel's Share

B

(Ian Tamblynらしい素晴らしいアルバム。旅するSSWのIanの目に映る世界はどれも霊的なほど美しく神秘的に輝いている。感動的な風景や旅の出来事の詩的描写の見事さは本作においてもなお絶品。w. Rodney Brown, Rebecca Campbell, Ken Kanwisher, Fred Guignon, etc. 2004作。North Track)

*JENN GRANT:The Beautiful Wild

A

(かたの女性SSW、Jennの4枚目。米国の女性SSWのMeg Christianのようなゆったりと漂うような唄なのだが、Jennは深いポップ・ロック・サウンド効果もあって、奥が深い。またイントロから始まり、Neil Youngの「孤独の旅路」っぽい2曲目から夢の旅路へと誘って、ラストの12曲目、子ども達の唄で終わったかと思っていると、しばらくしてJennのピアノの弾き語りという展開は長い夢の唄の旅をした気分させる。プロデュースはDaniel Ledwell。2013作。Blue Rose)

*AMELIA CURRAN:Spectators

A

(Ameliaは絶望や寂しさの中から光を求めるような唄が多く、唄から漂う雰囲気はNatalie Merchantを想起させる。闇の中で「キラ」の素敵な唄たちだ。どこかで70年代SSWのスピリットを引きずっている感じだ。ゲスト:Oh Susanna。2013作。Blue Rose)

*OLD MAN LUEDECKE:Tender Is The Night

A

(ここ数年で最高にお気に入りのかたのSSW。この自ら「老人」と名づけたパソビョー弾きSSWのおっさんが住む世界は、唄の世界も音楽的にも田舎っぽい、同時に夢のような世界。その夢のような世界がもう最高。なぜかTim O'Brienがプロデュースをやっていて、様々な楽器と唄で、まるで長年の相棒のようにわきあいあいと共演している。本当に魅力的なSSWだ。2012作。True North)

*DAVID FRANCEY:Live From Folk Alley

A

(2005年11月、Kent State Folk Festivalでのライブ。伴奏はShane Simpsonのギターのみ。Davidの唄の世界は流れる風景や絵本を眺めているように映像的だ。最後から2曲目の“Morning Train”は、リスト、ブッダ、アラーと駅や列車内で出会う唄だ。最後に出会うのは悪魔。発想が面白く、実に面白い唄だ。全曲訳詩が欲しいところ。素晴らしい唄と一緒にフェスの空気も味わって欲しい。2012作。Greentrax)

*MURRAY McLAUCHLAN:Swinging On A Star(1988作。カナダEMI)B

*MURRAY McLAUCHLAN:The Songbook... New Arrivals

a

(M. McLauchlanの本作は“Eddie”というミュージカルの為にMurrayが作詞作曲した14曲入。Murrayの唄は古いジャズやフォークソングを唄うようにソフトでノスタルジックで粋なサウンドにのってうたうMurrayの唄は気持ちいい。2006作。EMI)

*RAY BONNEVILLE:Bad Man's Blood

a

(南部ロック志向SSWのR. Bonnevilleの新作は南部魂を内にしっかりと込めた泥臭い南部志向音楽。好きものには贅沢な料理だ。噛むごと

- に舌鼓保証。Ray の最高傑作。2011 作。Red House)
- *WAYNE ROSTAD:Storyteller (1991 作。Stag Creek) G
- *DAVID WIFFEN:South Of Somewhere (1999 作。True North) G
- *MAE MOORE:Folklore A
 (カナダの自然や大地の自然現象や風景を入口に夢物語の世界へと誘うカナダ人のセンスが微細に発揮された見事な女性 SSW アルバムだ。Mae の唄はどの唄も自然や大地を描いた不思議な絵のよう。すぐにイメージするのはやはり Joni Mitchell。Mae の音楽性は丁度 Joni Mitchell の初期からジャズっぽい“Court And Spark”までの幅でキラと光るサウンドと唄とで魅了する。カナダの SSW の感性が光る名盤だ。2010 作。Poetical)
- *DEVON SPROULE:Don't Hurry For Heaven! A
 (カナダ生まれの米国ヴァージニア州の 100 人のコミュニティで育った Devon の本作は 60 年代～70 年代ロックの感触の諧謔的音楽を含め子悪魔的魅力全開。2010 作。Black Hen Music)
- *DEVON SPROULE:Upstate Songs A
 (2003 年作。アコースティック演奏による軽やかにひるがえるヴォーカルの少女っぽさと新鮮さそして夢見心地さはずこぶる魅力。胸キュン。2003 作。Tin Angel)
- *JOHN WORT HANNAM:Queen's Hotel A
 (本作が四枚目というカナダの SSW の J. W. Hannam の第一印象は Rodney Brown。ヴォーカルの質も似ているが、Rodney のようにマイペースで、温厚で、どこか爽やかな風が吹いているような感じも似ている。違うのはこちらの方がやや渋めというか、一歩引いた大人の哀感も感じられることだろうか。さりげなさがとても快い良質の SSW アルバムだ。w. Steve Dawson, John Reischman, Jenny Whiteley, etc. 2009 作。Black Hen Music)
- *COLIN LINDEN:Sad&Beautiful World 1975-1999 A
 (The Band 系南部ロックに深く傾倒する C. Linden の初期音源中心の 18 曲入編集 CD。2004 作。True North)
- *GREAT LAKE SWIMMERS:Lost Channels a
 (カントリー・ロック・ファン大推薦。かれらの音楽は 70 年代ロックに夢のヴェールを掛けた感じで、70 年代ロック・ファンの弱い部分をくすぐる夢の音世界を創作し切っている。天下一品。2009 作。イギリス Nettwerk)
- *FRED EAGLESMITH:Dusty A
 (Fred の本作は何と言うか鎮魂歌のように物悲しく緩やかに流れてく。祈るような Fred のヴォーカはじわりじわりと感動的。Scott Merritt のプロデュースはこれまでの Fred のルーツ・ロック的音作りとは一線を画した自由な発想による唄のイメージに即したもの。絶品！ Major Label)
- *VEDA HILLE:This Riot Life A
 (通算 12 枚目になる個性的 SSW の Veda の本作は不思議音楽。ピアノで音遊びしながら生まれたような彼女の唄は独り夢の中を旅する感覚の音楽。2008 作。Ape House)
- *VALDY & GARY FJELLGARD:Still In The Running A
 (副題“Contenders Two”。まさかの二人の嬉しい 2 枚目。齢を重ねた

じいさん SSW お二人の温かな唄達。昔っから好きな Valdy のヴォーカルは相変わらず。Ian Tamblyn の“Bay Of Sails”や John Prine の“Speed Of The Sound Of Loneliness”や Micky Newbury の“Them Old Snogs”等二人それぞれがヴォーカル&デュエットで人なつっこような唄を二人の活きの良いギターとマンドリンの伴奏でうたう。ヒューマン・ソング・ファン、心あったか保証。2007 作。Stony Plain)

- *TIM WILLIAMS: Songster, Musicianer, Music Physicianer A
(ホトトギス・ギター等ブルース・ギターを弾き年季の入ったブルースやブルース風自作曲を悠々とうたう。長年活動を共にしているバンドが数曲で共演してはいるが、バンドのヴォーカル&ギターとしての印象よりブルース・タイプの SSW 的なコのある味わい。一匹狼の風格。2007 作。Gayuse Music)
- *EILEEN McGANN: Beyond The Storm (Dragonwing) A
*JANE SIBERRY: Shushan The Palace A
(カナダの女性 SSW の Jane の本作は副題“Hymns of Earth”のクリスマス時期にあわせて制作された主に数世紀前のヘンデルやバッハ作曲曲を含む聖歌集。Jane ならではの優美な聖歌の世界。2003 作。Sheeba)
- *ENNIS SISTERS: Christmas B
(ニューファンドランドの美人3姉妹による美しいクリスマス・アルバム。トラッド・色も無いことも無いが、彼女等本来のフォーク〜カントリーなサウンドの姉妹の美声が活かされたフレッシュなクリスマス・アルバム。新年を祝うダンサブルな楽しい唄で幕。これはケープ・ブレント・トラッド・色濃厚なトラッド・ロック。2002 作。Warner)
- *TIM HARRISON: Tim Harrison ¥1000
(名作 79 年作“Train Goin’ East”と 85 年作“In the Barroom Light”からの 10 曲を新たに録音したもの。99 作。Second Avenue Songs)
- *KENNY BUTTERILL: Just A Songwriter B
(米国在住カナダ人 SSW、Kenny の本作はバック&ゲスト {Willie P. Bennett, Ray Bonneville, Norton Buffalo, Joe Weed, Larry Hosford, Mary McCaslin, etc.} もぼっちり固めた J. J. Gale 風似込み味 SSW7 アルバム。2003 作。No Bull Songs)
- *RAY MATERICK: Rockin’ The El Mocambo 82 a
(CD-R。“El Macambo Tavern”での 82 年の重厚ライブ。ギター、ベース、ドラムス、チェロ、サクソによるバックはドストス重戦車のパワー。Ray のヴォーカルは火の玉。スローもアップテンポも手に汗握る入魂のロック。2002 作。KingKong)
- *RAY MATERICK: Ashes And Dust a
(CD-R。最も音作りばっちりの僕等が知る 70 年代の Ray 風。ベース奏者が懐かしい Tim Drummond。Ray のしゃがれ声の唄とがっちり噛み合うタイトな 70 年代風ロック。すべてが理想の SSW7 アルバム。Steve Smith のスティール・ギターも Michael Fanferra のオルガンも Lisa Winn&Bob Lamothe のバック・ヴォーカルもいい味わいだ。抜群！2001 作。King Kong)
- *SCHULD&STAMER: You Got The Bread... We Got The Jam a
(Stamer が全面的にヴォーカル。もうノックの J. B. Lenoir 作“Voodoo Music”から Stamer の泥つとしたブルース・マジックの世界へ引きづり込まれる。ゲストの Long John Baldry もヴォーカルで 4 曲飛び入り。生きたブルース。絶句。98 作。Blue Streak)

- *SHANNON LYON:Tales Of A Yellow Heart A
 (2000年作“Summer Blonde”が人気だったS.Lyonの97年作。まるでNeil Young with Crazy Horse。粗削りな70年代風ロック。97作。Swallow)
- *KATHY PHIPPARD:Outside Lookin' In B
 (ニューファンドランドの個性派女性SSWのデビュー作。ピアノの弾き語りを要にした感情の起伏の大きな唄達は魅力。極めてかたがのSSW的個性。音作りも七変化。98作。Candle View)
- *TAMMY FASSAERT:Corner Of My Eye A
 (ヴァンクーバー-島住出身のさわやかな女性SSWアルバム。ブルグラスとフォークがアコースティックに気持ちよくブレンド。彼女の濁りのなさは貴重。2000作。Tam Can)
- *THE SWALLOWS:Turning Blue A
 (Blue RodeoのGlenn MilchemがThe Swallowsという名で作ったデビューソング。70年代ブリティッシュ・フォーク〜ロック的香り漂う不思議ロック。ジヤケットもサケ調。2000作。Magnetic Angel)
- *TONY KOSINEC:Almost Pretty A
 (T.Kosinecの79作の4枚目。2000作。Vivid)
- *SNEEZY WATERS:A Letter Home B
 (テキサス・ミュージックやブルースをベースにした雑食性に富むルーツ・ロック。Sneezyらしい個性が盛り込まれている。ヴェトナムの風格。97作。Watershed)
- *GORDON LIGHTFOOT:A Painter Passing Through a
 (G.Lightfootの本作は、清々しくもある種枯淡の境地。w. Daniel Lanois, Willie P. Bennett, Barry Keane, Terry Clements, etc. 98作。Reprise)
- *FRANCESCA:Au-Dela Des Couleurs B
 (フランス語、スペイン語、イタリア語、英語でつぶやくように、また情熱的に唄う地中海ムードの女性SSWアルバム。かなりの本格派だ。99作。BMG)